

第26回 文学館演習 ―日本近代文学資料の探索と処理―

2024年度 講義概要

2024年8月20日(火)～8月24日(土) 於：日本近代文学館講堂

近代文学の勉強法を知りたい人は必修！
使用する資料はすべて本物です！
博物館実習・近代文学の単位にできます！

講義概要

1. 総論

①近代文学館とは

中島国彦（館理事長）

②日本近代文学館の所蔵資料とその意義

安藤宏（東京大学教授）

日本近代文学館の歴史を振り返ると共に、資料の収集が実際にどのような形で進められているのか、その経緯や成り立ちについて解説する。作品の発表された雑誌や初刊本に実際に触れることの重要性、原稿、手紙など、直筆資料の研究上の意義などについて概説したい。それを通して日本近代文学館の特色について、あらためて理解を深めて頂ければ幸いである。具体例として「太宰治文庫」の概要の紹介などを行う予定。

2. 資料の収集と活用

①資料を活用する研究法（講義・演習） 図書

紅野謙介（近代文学研究者）

文学は、新聞・雑誌・書物といった〈容れもの〉に入れられて初めて読者の元に届く。では、そのうち書物を取りあげるとどのような見方ができるか。今回は何度も単行本になった中里介山『大菩薩峠』を素材にして、資料研究の具体的な方法を探り、具体例を見せたい。

②資料を活用する研究法（講義・演習） 自筆資料

渡部麻実（日本女子大学教授）

近代文学の資料には、活字化された資料と手書き資料という、二つの形がある。後者には、創作メモ・ノート、草稿、書簡、日記のほか、活字化されたテキストへの書き込みといった自筆資料が含まれる。自筆資料に目をつけること、あるいは、自筆資料と活字化された資料とを見比べること、新たに何が見えてくるのだろうか。近代作家が遺した資料をひもときながら、文学研究における自筆資料の分析方法と可能性について考える。

③資料を活用する研究法（講義・演習） 雑誌

大原祐治（実践女子大学教授）

いわゆる文芸誌のみならず、総合誌や各種専門誌など、さまざまな雑誌のなかに文芸欄が設けられきたことからわかるように、近代文学の歴史と雑誌は深く関わっている。雑誌を刊行した出版社および編集者が果たした役割について考えることは、文学研究における重要な課題である。作家志望者や新進作家たちが自ら刊行した同人雑誌の存在と、そこで形成される人的ネットワークの問題も見逃せない。雑誌に注目し、資料として活用することで、どのような研究が可能になるのか。具体的な事例を紹介しながら考えたい。

④資料を活用する研究法（講義・演習） 新聞

山田俊治（横浜市立大学名誉教授）

近代社会に固有の文学形式である小説は、どのように成立したのであろう。その成立に当たり、近代社会の主要なマスメディアであった新聞が果たした役割は、無視することができない。新聞が小説を復活させる原動力となり、新たな出版形態と結びついて流行現象となったのである。そうした過程を、文学館所蔵の草双紙類を具体的に参照しながら、『小説神髓』によって小説が言語芸術となるまでの時代について考えてみようと思う。

資料の

声を聞く―

公益財団法人 日本近代文学館

THE MUSEUM OF MODERN JAPANESE LITERATURE
Komaba, TOKYO

153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-55

（駒場公園内）

tel 03-3468-4181

<http://www.bungakukan.or.jp/>



図書・雑誌の利用（実習）

書庫には、日本近代文学館にしか所蔵されていない貴重な図書・雑誌が数多くあります。普段は職員以外の入庫はできませんが、演習日は特別です。②・③の講義をふまえ、実際に書庫に入って図書・雑誌を手にとり、自由なテーマでミニレポートを書いてみましょう。（スリッパ持参ください）

挿絵・写真資料の調査・保存（実習）

文学館の挿絵・写真資料は出版物やテレビ番組などで広く利用されています。その整理・保存方法について、写真利用カードを作りながら学んでみましょう。

肉筆資料の解説（実習）

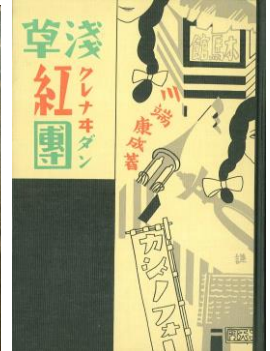
所蔵する肉筆資料を公開する機会を設けることも、文学館の大切な仕事です。この時間では館報「日本近代文学館」の例にならって文学者の手紙を翻刻してみましょ。くずし字解説に挑戦！

3. 文学をめぐる問題

①海外における日本文学の研究（講義・演習）

和田博文（東京女子大学特任教授）

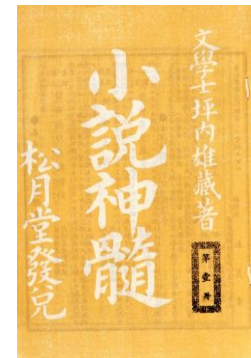
海外の研究者との国際的共同研究は、ここ20年ほどの間に活性化してきた。デジタルデータの拡大や、ZOOMの使用は、共同研究の可能性を大きく開こうとしている。21世紀初頭からのヨーロッパや東アジアの研究者との共同研究に触れながら、東アジアのエリアにおける研究の今後を展望する。東京女子大学比較文化研究所と上海外国語大学日本研究センターの研究所協定と国際共同研究についても紹介する。



②文学と大衆（講義・演習）

宮内淳子（近代文学研究者）

「大衆」が示す意味は広い。ここでは1920年代と1950年代の2つの時期に絞り「大衆」と文学との結びつきを、本館に収蔵された書籍や雑誌を紹介しながら考えたい。1920年代は教育の普及や出版事業の拡大等による読者層の広がりが、雑誌や全集の刊行となって表れた。戦後になるとマスコミの拡大と視聴覚文化の隆盛のもと、「大衆」は受け手にとどまらず発信者となり、活字メディアのあり方も変えていく。1950年代ではその変化を、サークル誌の紹介や、雑誌メディアと文壇の関わり等から見ていく。



4. 文学の周辺(1)

①文学と映画（講義・演習）

石田仁志（東洋大学教授）

1910年代以降の日本の小説と映画との結びつきについて考えていきたい。19世紀末からの映画の発展は人間に新しい視覚体験を与えたといえるが、20世紀になってアヴァンギャルド芸術運動の展開とも相まって、様々な新しい表象へと結びついている。映画の表現を意識した新しい小説の実験の一端を、文学テキストと映画の両面から検討する。谷崎潤一郎、川端康成、横光利一らを取り上げてお話をさせていただく。



②出版メディアの戦略・検閲（講義・演習）

五味淵典嗣（早稲田大学教授）

日中戦争・アジア太平洋戦争期の文学表現を検討する上で、言説の検閲や統制というファクターを考慮することは不可欠である。この授業では、本館が所蔵する戦時期の文学雑誌を参照しながら、戦時体制下の著作者や出版社が検閲や統制の枠組みとどう向きあったか、表現の現場にどんな力が作用していたのかを検討したい。合わせて、検閲や統制を意識した研究を行う上で参照すべき資料等についても解説する。



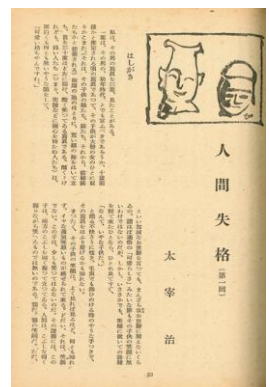
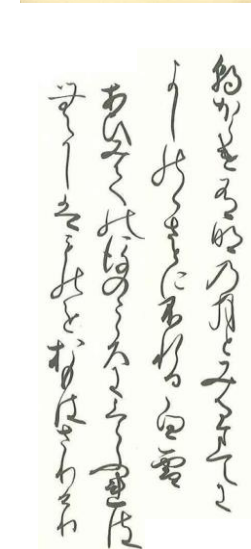
5. 資料の保存・公開・展観

①資料の保存・修理（実習）

和本の四つ目綴じ補修をします。文学館で所蔵している「中里介山文庫」（中里介山旧蔵書）を使用します。（太めの縫い針一本持参ください）

②資料の公開・展示／図録（実習）

文学館が所蔵する資料をいかに公開・展観し、文学の魅力をいかに伝えるか、展覧会などを例に考えてみましょう。



6. 文学の周辺(2)

①挿絵・口絵と文学（講義・演習）

出口智之（東京大学准教授）

あまり知られていないが、近代の作家たちもかなりの期間、江戸の戯作者同様に、口絵や挿絵に詳細な指示を与えていた。しかも、あえて文章とは異なる内容の絵柄を指示し、分業を図った例が少なくない。すなわち、近代文学の時代においてもなお、絵と文章のセットで作品が構想されていたのである。この講義では、文章からはわからない作家の作意や作品上の効果を、実例とともに解説し、絵と文章を総合的に捉える必要性と可能性について考える。

②文学と美術・音楽（講義・演習）

中島国彦（館理事長）

日本の近代文学の歩みは、同時代の美術や音楽と深いつながりのもとに形成されている。今年度は、北原白秋を取り上げ、文学作品が美術や音楽とどう絡まるのかを考えていきたい。白秋が親しんだ西洋芸術（絵画や音楽など）や日本の伝統芸術を跡付けることは、この問題を考える格好の材料となっている。実際の美術作品の画像や関連音源を利用しながら説明し、あわせて、同時代の芸術家とのつながり、芸術環境についても紹介したい。